



詩と社會との關係

伊藤左千夫



特別
文庫14
A171



53-1716

精神の上にも怯懦とふものなくこい決して生存し
得らうともであらう精神を多く働かす人々あつては
怯懦の供給が必要であります 怯懦とやすとや
洗滌が多少も知れさせぬ今知の怯懦といふもの
更に怯懦するの意でなく精神の~~中心~~中心の必
要な怯懦とすつてあらうもの 今知の無限を
く人々の怯懦といふものも無限なものでありま
す、天の恵み人々に子種を授けの怯懦を興へて
居ります 生活の事、意く西に怯懦を意味して

7

居るをといふ人倫上の関係 親子下の兄弟や夫婦
の弟や朋友親戚等の間や 吾等に信任の言葉を
おかくらうてくれと 涙を拭くも怯懦を感し
をわつても怯懦を感し 勤つても怯懦を感し
自ら休んで居つても怯懦を感します 泣く
も怯懦の通であらう
活動の盛んなるといふもの、自然的な天賦の
足が来ません、又満足と居る事もないのであ
りません、必ず性癖、誣く所、従つて、より後

くの強々快意を伴ふるが人々の响然
とあるが、あります。何もかも一色
ふ快意と息水の時をなすか、い
一版でいふと、道とあり、
茶のぬくに、息をします。か、
人々の此道、中とふものか、
のであり、一色に快意があるから、
いふと、心快をたふす、
のであります。彼鳥獣の類を、

子

成り必す趣いたるもの、
況して苦境あり、人々の、
精神を養ふ、
和、諸君、
教、
うの、
そ、
そ、



